

経済経営学類
令和3年度 学校推薦型選抜:小論文
(A推薦・B推薦)

資料は、山極寿一『ゴリラからの警告―「人間社会、ここがおかしい」』(毎日新聞出版, 2018年)からの抜粋である。これを読んで、以下のすべての問題に、日本語で答えなさい。

問題 1

「なぜ、人間だけが家族を温存したコミュニティーをつくったのか」を、ゴリラと人間の相違を明確にしなが、400字以内で説明しなさい。

問題 2

筆者は、「インターネットや携帯電話で、近くにいる人より見えない場所にいる人を優先する社会が出現した」と述べている。このような社会における問題点について、考えるところを400字以内で述べなさい。

- ・ 解答は横書きとする。
- ・ 句読点や空白も字数に含める。
- ・ 算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

複数の家族を含むコミュニティ(共同体)は、サルや類人猿には見られない人間だけの特徴だ。ゴリラは人間の家族と似た小集団をつくるが、それらが集まってコミュニティをつくることはない。チンパンジーには家族的な集団がなく、複数のオスとメスがコミュニティのような大きな集団をつくるだけだ。

なぜ類人猿は家族とコミュニティを組み合わせた社会をつくれぬのか。その理由は、家族とコミュニティはそもそも維持される原理が違うからだ。家族は見返りを求めない援助と協力によつて、コミュニティは集まることで利益が得られるような互酬性や規則によつて、それぞれ成り立っている。しばしばこの二つの原理は拮抗する。地域社会の厄介者が家族では最良の父親という場合や、ある組織ではみんなの尊敬を集めるリーダーが家族のなかでは嫌われ者という場合があるのだ。その矛盾に耐えられないから、サルや類人猿はどちらかの原理により強く依存して群れをつくる。

ではなぜ、人間だけが家族を温存したコミュニティをつくつたのか。いや、つくることができたのか。その背景には文化的な理由より、生物学的な要因が大きく関与していたと私は考えている。

最近、オランウータン、ゴリラ、チンパンジーといった類人猿の野生における成長や繁殖の特徴が明らかになって、人間の生活史の不思議な側面が浮かび上がってきた。人間は多産であるにもかかわらず、子どもの成長が遅いのだ。

類人猿の赤ちゃんは人間より長い期間母乳を吸って育つので、その間は母親が妊娠できない。ゴリラは3〜4年、チンパンジーは5年、オランウータンはなんと7年も母乳を吸って育つ。だから出産間隔が長く、生涯に数頭しか子どもを産めないし、おとなになる子どもは2頭前後である。そのため、数は増えず、今は絶滅の危機に瀕している。

ところが、人間の赤ちゃんは2年足らずで離乳し、母親は年子を産むことも可能だ。生涯に10人以上の子どもを育てることもできる。

この特徴は遠い昔、人間の祖先が類人猿のすむ熱帯雨林から離れて、大型の捕食動物が多い草原へと進出した時代に獲得したと考えられる。逃げこむ樹木のない草原は危険だし、無防備な幼児がよく犠牲になるのだ。

肉食獣の餌食になりやすい動物は生涯にたくさんの子どもの産む。その方法は二つある。一つはイノシシのように一度に何頭も子どもを産む方法だ。もう一つはシカのように、一産一子だが子どもの成長は早く、毎年子どもを産む方法だ。人間の祖先も、捕食によつて高まる子どもの死亡率を補うために多産になったと考えられる。サルや類人猿の仲間である人間は、一度にたくさんの子どもの産むのではなく、出産間隔を短くして何度も産む方法を選んだのだ。森林性と草原性のサルを比べると、草原性のほうが多産だし、子どもの成長も早い。

しかし、人間は多産なのに、子どもの成長は類人猿よりずっと遅い。それは脳を大きくしたためである。

人間の進化史で、最も早く現れる人間らしい特徴は直立二足歩行だ。これは長い距離をゆつ

くり歩くのに適した様式で、自由になった手で物を運べる利点がある。おそらく、広い範囲で食物を探し、それを安全な場所に運んで食べたのだ。もちろん、肉食獣にねらわれやすい子どもたちに運んだと思われる。

その数百万年後、脳が大きくなりはじめた。ところが、二足歩行によつて骨盤が皿状に変形し、産道の大きさが制限されて大きな頭の赤ちやんが産めない。そこで人間は、類人猿とあまり変わらない頭の大きさの赤ちやんを産み、類人猿の2倍以上の時間をかけて子どもの脳を大きくすることにしたのである。

ゴリラやチンパンジーの子どもの脳は、4歳ほどでおとなの大きさに達する。しかし、人間の子どもの脳は12〜16歳まで成長を続けて、ゴリラの脳の3倍になる。とくに生後1年間はゴリラの4倍のスピードで脳が成長し、5歳までにおとなの脳の90%に達する。脳はコストの高い器官で、成人でも体重の2%しかないのに摂取エネルギーの20%を費やしている。成長期の子どもの脳は45〜80%の摂取エネルギーを必要とする。そこで人間は、身体の成長を後回しにして、脳の発達を優先するように成長期をのばした。おかげで、頭でつかちで手のかかる子どもをたくさんもつことになったのだ。

これが、家族とコミュニティーの必要になった原因である。母親の手だけでは子どもを育てられないから、共同の育児が必要になる。複数の家族が集まり、子育てを優先課題にしてさまざまな協働体制を整えたのだ。

類人猿の赤ちやんはとても静かだ。ゴリラのお母さんは生後1年間、片時も赤ちやんを腕から離さない。赤ちやんはずっと母親にしがみついているから、泣いて自己主張する必要がない。人間の赤ちやんは、けたたましい声で泣く。これは、産まれ落ちてすぐに母親以外の手に渡されて育てられるからである。

人間の赤ちやんはお母さんにつかまれないほどひ弱である。しかし、体重はゴリラの赤ちやんの2倍近くある。それは、人間の赤ちやんが分厚い脂肪に包まれて産まれてくるからだ。脳を急速に成長させるためには過大なエネルギーが必要である。脂肪はそのエネルギーの不足を補う役割を果たす。だから、人間のお母さんは重くてひ弱な赤ちやんを抱き続けることができず、置くか、だれかに渡すことになる。そこで、赤ちやんはけたたましく泣いて自分の不具合や不満を訴えるのである。泣くのは赤ちやんの自己主張なのだ。

その赤ちやんを泣きやませようとして、多くの人々が共同で働きかけ、食物をもち寄つていっしょに食べ、子守歌が生まれ、音楽で人々の気持ちを一つにするコミュニケーションが発達した。まだ言葉がしゃべれない赤ちやんは、いくらしゃべりかけてもその意味がわからない。でも、赤ちやんに語りかける声は世界各国共通で、トーンが高く、くり返しが多いという特徴をもっているという。赤ちやんは言葉の意味ではなく、音の高さと抑揚を聞いているのである。ある仮説によれば、それがいつしかおとなの間にも普及し、音楽として用いられるようになったという。

共食と音楽は、言葉が登場する以前から人間に備わった、類人猿にはほとんど見られない特

徴である。これらのコミュニケーションによって発達したのが、他者を思いやる心の働きだ。音楽には、お母さんと赤ちゃんのように一体化して、世界を共有させる働きがある。それを人間は言葉によって高めた。自分が体験していないことを言葉によって他者と分かち合い、多くの人と交流できるようになった。

しかし今、その共感を人間はだんだん失おうとしている。コミュニケーションの方法が変化したからだ。インターネットや携帯電話で、近くにいる人より見えない場所にいる人を優先する社会が出現した。この方法では、家族とコミュニティーの異なる原理を併用することができない。自己を重んじ、自分を中心に他者につき合う傾向が肥大しつつある。逆説的だが、それは人間としての自分を失うことに通じる。なぜなら、人間は自分で自分を定義できず、信頼できる人たちの期待によって自分をつくる必要があるからだ。その信頼の輪が家族と共同体だったのだ。

今、家族の危機といわれて久しい。こう見てくると、家族の崩壊は自己アイデンティティーの危機なのである。

令和3年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 学校推薦型選抜

資料は、山極寿一『ゴリラからの警告－「人間社会、ここがおかしい」』(毎日新聞出版, 2018年)からの抜粋である。

問1では、資料から、筆者の考えを正確に読み取る理解力、およびそれを整理し表現する力をみることを意図している。

問2では、インターネットや携帯電話の普及にともない、コミュニケーションの方法が変化した現代社会における問題点について、自らの考えを論理的に表現する力をみることを意図している。